

「研修」

解説／草信和世

(大学教員)

「研修」をテーマに頂き、まず「研修」を検索語として『幼児の教育』から記事を探しました。しかし検索された記事は比較的新しいものばかりでした。いにしへの「研修」とは何かと思いい、次に「保育者・「保母」・「保母」を検索語として広く探しました。すると、保育者の「教育」という観点から、保育者に「教養」を進言する三編の記事が見つかりました。それは、「保母と詩感の教養」(一九二九年)・「保母の教養」(一九三九年)・「幼児保育者と教養」(一九四七年)であり、いずれも倉橋惣三によるものでした。ここから、倉橋がほぼ十年ごとに三回にわたり、

繰り返し保育者の「教養」について取り上げていることがわかりました。今回は、一九二九年に彼が初めて「教養」について述べた一編をご紹介します。思います。

この文章では、文頭に「玉の杯底なきが如し」という言葉が何度か出てきます。これは、外見は極めて良いが、肝心な所が欠けていては使いものにならないというような意味合いです。倉橋はこの短い言葉の中に、保母を貴い玉の杯に例えて、そこに肝心の底がないのは大変惜しいことであるという思いを込めています。このようなことを踏まえて読んでい

ただけるとよいと思います。

そして、彼は保姆に詩感（心のはだのこまやかさ）の所有者であることを求め、これを不断に教育するために詩の教養を怠らないようにと説きます。ここには、一九四七・四八年に至って「高い教養を似て幼児と共に低くいる人、その人こそ、眞の幼児保育者である。」^{注1}とし、保育者の真諦を「藝術性」^{注2}という言葉で表す彼の思想の萌芽を見ることができます。また、現代では「研修」において、保育者の資質・専門性とは何か、保育者の何を育てることが保育者の根本を育てることになるのかという問いが提出されていきますが、この一編は、この問いへの示唆をも含むと考えられます。

日本の子どもを思い、日本の保育の発展にその身を捧げた倉橋の「思想の根底には、^{注3}日本的性格が色濃く存在」し、その文章は「日本的感性において感じとるもの」^{注4}とされています。彼の思いあふれるこの一編との出会いが、日本の保育との出会いと

なり、世界の扉を開くきっかけとなれば幸いです。

（本稿では、アーカイブズ記事の再録に際して、旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは一部現代仮名遣いに改めました。）

注

1 倉橋惣三「幼児保育者と教養」

『幼児の教育』第四十六巻第五号 フレーベル館

一九四七年 P.3

2 倉橋惣三「幼児保育の藝術性」

『幼児の教育』第四十七巻第六号 フレーベル館

一九四八年 P.2

3 森上史朗『子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯

と仕事（上）』フレーベル館 二〇〇八年 P.171

4 同右 P.175

保母と詩感の教養

(一九二九(昭和四年)年 第二十九卷第六号)

倉橋惣三

「玉の杯底なきが如し」という言葉がある。保母にして詩感なきは、まさにそれである。必ずしも保母に限ったことでなく、すべての人に於て(おいて)そうであるけれども、幼児教育者に於て、殊に、此の憾みの深からざるを得ぬ。詩感(こころ)は自然に對する感觸の繊細さである。心のはだのこまやかさである。而して、それは幼児の心の貴重な特質の一つである。詩感の所有者に接するに詩感の欠くべからざるは言うまでもない。

幼児の心の特質を粗野だと見る人がある。確に(たしか)そう見られることが常である。しかし、その粗野は原始的粗野であつて、すきんだ粗野、麻痺した粗野で

は決してない。原始的粗野には、その裏に一種の繊細と、こまやかさをもっているのが特色である。人間の的にもそうであるが、殊に、自然に對して、それが最も顕著である。或は顕著でないかも知れぬが、最も真実である。草の葉に、土の色に、空の光りに雲の動きに、ふと動く幼児の真実なる詩感を否定することは出来ない。たゞ、その詩感の、余りに真実に、余りに純な為(ため)に、大人の場合のように浮動しない。漂泊しない。沉ん(い)や低回しない。ふと湧き、ふと戦(おの)いて、直ぐ(す)其のまゝに消えてゆく、幼児自身素より心づかない程の速かさに通り過ぎて仕舞(しま)う。その為(ため)に、見えないものには見えないかも知れない。捉えられないものには捉えられないかも知れない。そこで、外面の粗野だけが言われるのであるけれども、その淡きが中の微妙さは、見えるもの、捉えられるものには見のがせない。——此の詩感の所有者の友として、保母に詩感を欠くべからざるは言うまでもない。

○ 「玉の杯底なきが如し」など、は、第三者としての吾等の懐みである。幼児自身、詩感なき保姆に、どういう気持ちを持たされることであろうか。そよ風にそよぐ若葉が、古木の幹、岩石の背に居るような物足りなさを感ぜずにはいられまい。漣立^{なみだり}て、ゆく細流が、コンクリートの堤に沿うている時のような物足りなさを感じずにはいられまい。別段何が不服というでもないが、やっぱり不満を免れぬのである。我が小枝の、そよぎのまゝに並木もそよいで欲しい。漣のこまかいゆらぎのまゝを小草の岸にも受けて貰^{もら}いたい。といった不満を禁じ得ないのである。微^{わず}かながら、心の底の不満である。

保姆は幼児と同じ目で物を見、同じ耳で物を聞き、同じ心で物に触れる人でなければならぬ。さればこそ幼児は、その人と共に物を見、物を聞き、物に触る、ことを楽しむのである。同じ喜びに喜び、同じ驚きに驚き、同じ感激に感激して貰えるからである。

而して、その「同じ」というのは、たゞ同じ形、同じ種類、同じ意味にとかいうことのみではない。心の同じ振動に於てということでもあらねばならぬ。否、それこそ、一番大切な要件であらねばならぬ。敏に對する鈍。純に對する濁。わけても、生に對する涸^こ。そういう不一致であつてはならぬのである。

○ 斯^かくいえばとて、保姆が皆詩人でなければならぬというのではない。況んや、幼児の前に詩を語り、詩を誦^もせよというのでは勿論^{もちろん}ない。敢^あて詩感と云うすなわち、心性の一素質としての詩感の所有者たるを求むるのである。しかも、われ等に、殊に、教育者に、またしても欠け易いのが、この詩感そのものである。そこで、不断に之^これが教育を必要とする。涸^これ、乾^こき、固化し易い吾れ等の心に、詩感のやしない、必要とするのである。そこでい、絵を見ること、い、音楽をきくこと、殊に、い、詩を誦^もむこと、此の三つの中でも、い、詩を学^まぶことを、保姆の教育

の最も重要な一つとしなければならぬ。幾多の重要な多面の教育に併せて、詩の教養を怠ってはならぬのである。——保姆として一番大切な幼児と同じ心の感觸を養い育てるために。

殊に、此頃の傾向として、読むもの聴くものが、多くは理に偏し、術に専らになり易い中であつて、保姆の傍には、是非ともい、詩集がなければならぬ。その詩は、その人の趣味の好むところに任す。詩感の豊富なる眞の詩人のものならば、どれでもいい。そして、詩感を養つて呉れるものならば、どれでもいい。短歌でもいい。長詩でもいい。我國の詩人のでもい。外国の詩人のでもい。吟誦反復、以て、其人としての詩感を鈍らさぬように自己教養すべきである。

○
詩感だけが保姆の要件でないことは勿論である。故にこそは玉に譬えた。たゞ、如何に他の要件に完き保姆であつても、詩感なきは、その玉に底なきが

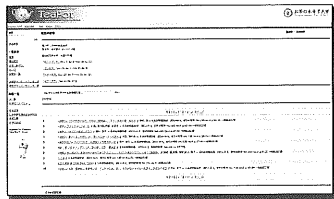
如しというのである。玉として貴ければ貴い程、底なきが益々惜しいという訳である。但し、何人も、われに詩感なしとてヒ感し給いそ。詩感は無来誰れにでもあるのである。たゞ、断えず養わないと涸れることがある。さればこそ、その自己の教養が必要だといふのである。

山は若葉人は身軽き比に哉
一茶

幼児の教育 バックナンバーを
WEBページで公開中

「幼児の教育 TeaPot」で

検索



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/52377>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成23年発行の第110巻第4号までご覧になれます。